

時評 とくしま



山崎 勝之

鳴門教育大
大学院教授

人間の「暴力性」に挑む

小学校で異変が起きている。学校内での暴力行為の発件数が年々増加しているのだ。中学生では減少しているだけに、この増加は気になる。

先月公表された文部科学省による児童生徒の問題行動の調査（2014年度）で、その傾向は決定的になった。児童生徒全体では、徳島県の暴力発生率は全国平均をやや下回った。大阪府は飛び抜けて高く、東京都は意外にも最低水準だ。

学校での暴力といえは中学校で際立っているが、それが低年齢化しつつある。ささいな障壁への欲求不満にキレるような暴力を振るい、いじめでは、冷徹に被害者の仲間関係を断つ、陰湿な、

学校のバイオレンス

広義の暴力も目立つ。子どもの暴力の発生源は、親の行動にあることが多い。親が暴力を頻繁に使うと、子どもの行動のモデルとなる。それに、一貫しない養育態度や子ども自身への体罰の多用もその原因になる。

こうして暴力性が増した子どもは、将来同様の養育態度でわが子に接する確率が高まる。児童虐待がうなぎ上りという近年の現象も、同じ軌道を描く。この世代間伝播の悪循環は威力を増し、学校での暴力は発現年齢を早め、増える。

「暴力性は人間の本能」が児童生徒をいじめる現象も見逃せない。大阪の子どもは戦争から解放されないか」と問うたとき、フロイトの回答は、その方法を模索しながらも終始、悲観的に見えた。

今も多くの学校で、指導という名目で体罰が繰返されている。怖いのは、あの大阪の高校でされたアパートを訪ねてみた子どもは、顧問教員の処分軽減を求める嘆願書が、保護者の卒業生から千通を超えることだ。子どもに接する確率が高まる。児童虐待がうなぎ上りという近年の現象も、同じ軌道を描く。この世代間伝播の悪循環は威力を増し、学校での暴力は発現年齢を早め、増える。

「暴力性は人間の本能」が児童生徒をいじめる現象も見逃せない。大阪の子どもは戦争から解放されないか」と問うたとき、フロイトの回答は、その方法を模索しながらも終始、悲観的に見えた。

2人は、あのヒトラーの時代にいた。昨年オランダで、アンネが潜居したアパートを訪ねてみた。ヒトラーに突き動かされたグループで非道を行う人間の本性に心が痛んだ。だが、ひるむことはない。暴力的な子どもへの対処や予防法はある。本県発で全国展開中の予防教育もその一つだ。この教育に本気で取り組めば、学校文化さえ健全化する。学力を偏重し、ストレスの多い学校環境も、改善すれば効果がある。要は学校が本気で取り組むかどうかだ。

学校での暴力は、子どもである」。精神分析学者フロイトの主張は手厳しい。本県穴吹町出身の三宅速医師と親交があったアインシュタインがフロイトに挑む。

「暴力性は人間の本能」が児童生徒をいじめる現象も見逃せない。大阪の子どもは戦争から解放されないか」と問うたとき、フロイトの回答は、その方法を模索しながらも終始、悲観的に見えた。

2人は、あのヒトラーの時代にいた。昨年オランダで、アンネが潜居したアパートを訪ねてみた。ヒトラーに突き動かされたグループで非道を行う人間の本性に心が痛んだ。だが、ひるむことはない。暴力的な子どもへの対処や予防法はある。本県発で全国展開中の予防教育もその一つだ。この教育に本気で取り組めば、学校文化さえ健全化する。学力を偏重し、ストレスの多い学校環境も、改善すれば効果がある。要は学校が本気で取り組むかどうかだ。

学校教育はいすこへ。人間の暴力性の芽を摘む絶好の機会と言っのに。